2025 年 アメリカ学会　第 59 回年次大会 プログラム

１．開催日　2025 年 5 月 31 日（土）・6 月 1 日（日）
２．会場　　北海道大学 札幌キャンパス 人文・社会科学総合教育研究棟　札幌市北区北 10 条西 7 丁目
　大会企画委員長　　菅（七戸）美弥　m-suga アットマーク u-gakugei.ac.jp
　会場責任者　　会沢恒　aizawa アットマーク juris.hokudai.ac.jp
３．プログラム　（報告要旨は別に「報告要旨集」に掲載されます。時間は全て日本標準時です）
　* タイトルの日英別は、発表言語によるものです。
　* 教室は変更の可能性があります。
　* 未定や変更箇所については、今後ホームページや ML で周知致します。
　* 今大会の分科会はオンラインで開催されます。現在会員の方のみ参加が可能です。

第 1 日 2025 年 5 月 31 日（土）　午前の部

自由論題報告　　9:30〜11:30
【Session A 政治・宗教・歴史記憶　Politics, Religion, and Historical Memory】8 番教室
司会：山本貴裕（広島経済大学）
討論者：井上弘貴（神戸大学）
１．報告者：相川裕亮（金城学院大学）
「米福音派の日本伝道：ビリー・グラハム日本クルセードの影響」
２．報告者：上野継義（京都産業大学）
「“安全第一”の起源物語をめぐるトランスナショナル・ヒストリー―記憶は忘却の果実―」
３．報告者：李雨桐（神戸大学・院）
「オピオイド・パンデミックを巡る州と地方との攻防に見るアメリカ州司法長官の役割」

【Session B 移民政策・社会運動史・メディア　Immigration Policy and Transnational Ethnic Studies】2 番教室
司会：今野裕子（亜細亜大学）
討論者：佐原彩子（共立女子大学）
１．報告者：鶴原麻美（京都大学・院聴講生）
「アラブ系アメリカ人メディアに見る『アラブの春』」
２．報告者：藤重仁子（森ノ宮医療大学）
「アメリカの外国人看護師受け入れ政策の展開過程―第二次世界大戦後から 1989 年移民看護救済法成立まで―」
３．報告者：山下靖子（津田塾大学）
「戦後ハワイにおける『沖縄系移民』と『日系アメリカ人』のエスニシティの変容―沖縄の『日本復帰』問題を巡る諸相から」

【Session C 教育・歴史・エスニシティ　Education, History, and Ethnicity】5 番教室
司会：Koji Ito 伊藤孝治（Osaka University 大阪大学）
討論者：Rika Lee 李里花（Chuo University 中央大学）
１．報告者：Jason Barrows（Kyoto Prefectural University of Medicine　京都府立医科大学）
“Bridging Historical Gaps: Evaluating the Representation of Japanese Americans in U.S. Social Studies

Textbooks”

２．報告者：Roderick Labrador（University of Hawai ʻi at Mānoa）

“Reeling in Reality: Whitewashing and Whiting Out WWII Japanese American Incarceration”

３．報告者：Mary Kunmi Yu Danico（University of Hawai ʻi at Mānoa）

“Hidden Stories of Honouliuli, Hawaii: The Korean Prisoners of War 1942-46”

【Session D 環太平洋的文化交流とエスニシティ　Transpacific Creative Arts and Ethnicity】1 番教室

司会：渡久山幸功（琉球大学）

討論者：Claire Ravenscroft (International Christian University　国際基督教大学)

１．報告者：宮下和子（鹿屋体育大学・名）

「Foster at 200 と日本人の『スティーブン・フォスター観』」

２．報告者：Ethan Caldwell（University of Hawai ʻi at Mānoa）

“Black Resonance: Remixing Oceanic Blackness and Belonging Through Song”

~~３．報告者：Chang Liu（Heidelberg University）~~

~~“From *Erotica* to *Ray of Light*: Madonna’s American Pop Evolution and the Challenge of Ageism”~~

休憩　　12:00〜12:45

午後の部

理事・評議員会　　12:00〜12:45　　8 番教室

清水博賞・中原伸之賞授賞式　　12:45〜13:00　　8 番教室

第一部　シンポジウム「北海道とアメリカ」　13:15〜16:00　　8 番教室

司会：土田映子（北海道大学）

討論者：中嶋啓雄（大阪大学）

報告者：

小檜山ルイ（フェリス女学院大学）

「アメリカから来たキリスト教と北海道―女性の経験を加えて」

佐藤円（大妻女子大学）

「アメリカ先住民とアイヌ―歴史的視点からの比較」

宮武公夫（北海道大学）

「アイヌの人々と 1904 年セントルイス博覧会―残されたモノと記憶を通して」

第二部　開催校企画１　ラウンドテーブル「トランプⅡの半年」　16:10〜17:40　　8 番教室

司会：　小浜祥子（北海道大学）

話題提供者：

渡辺将人（慶応義塾大学）

藤本龍児（帝京大学）

馬場香織（東京大学）

懇親会　　18：30〜20:30（予定）　　札幌ガーデンパレス

第 2 日 2025 年 6 月 1 日（日）

午前の部

部会・ワークショップ　　9:30〜12:00

【ASA 関連ラウンドテーブル】　5 番教室

「日米におけるアメリカ研究の実践―「アメリカ研究」と”American Studies”の現在地と展望」

司会：坂下史子（上智大学）

パネリスト：

有光道生（慶応義塾大学）

清水さゆり（ライス大学）

関口洋平（フェリス女学院大学）

松田武（京都外国語大学前学長・大阪大学名誉教授）

吉原真里（ハワイ大学マノア校・東京大学）

【部会 A　クィア・アメリカ―抵抗とサバイバルの歴史と文化】　1 番教室

司会：瀬名波栄潤（北海道大学）

討論者：髙内悠貴（弘前大学）

報告者：

兼子歩（明治大学）「クィア運動を生み出す文脈としての多人種都市―戦後ホモファイル運動の登場とロスアンジェルス」

ハーン小路恭子（専修大学）「インターセクショナリティとしてのクィアネス―ドロシー・アリスン作品に見る階級・場所性・セクシュアリティ」

菅野優香（同志社大学）「クィアな日系アメリカ人史を探して―TT Takemoto の実験映画」

【部会 B　アメリカの大学を取り巻く諸状況】　2 番教室

司会：会沢恒（北海道大学）

報告者：

藤岡真樹（京都大学・講）「歴史的観点から見た STEM 教育」

横大道聡（慶応義塾大学）「キャンパスにおける表現の自由」

吉田香奈（広島大学）「大学生の教育費負担軽減と連邦学資ローン」

休憩　　12:00〜12:45

総会　　12:45〜13:15　　W103 教室

開催校企画 2　ラウンドテーブル　　12:00〜12:45　　W408 教室

"Iroquois (Haudenosaunee) and Ainu Internationalism: Aspects of Their Relations with other Nations from the Seventeenth Century to the Present"

Panelists:

Scott Manning Stevens (Akwesasne Mohawk) (Syracuse University)

Evan Haefeli (Texas A&M University)

Kanako Uzawa 鵜澤加那子 (Hokkaido University 北海道大学/ AinuToday)

Comment: Takeo Mori　森丈夫 (Fukuoka University　福岡大学)

午後の部

部会・ワークショップ　　13:30〜16:00

【OAH-ASAK ワークショップ　“Desire, Pain, and Melancholia"】　5 番教室

Chair: Hiroyuki Matsubara 松原宏之 (Rikkyo University 立教大学)

Speakers:

Rebecca L. Davis (OAH, University of Delaware）"Writing—and Teaching—about the History of Sexuality in America"

Cara C. Caddoo (OAH, Indiana University Bloomington) "Interracial Desire and the Regulation of Hollywood Film"

Jungha Kim (ASAK, Seoul National University) "Rethinking the Death Drive as Gendered Exhaustion in Yiyun Li's Writings"

Yuri Amano 天野由莉 (Musashi University 武蔵大学) "Pain, Power, and Professional Identity: Southern Physicians and Enslaved Patients in Antebellum America"

【部会 C　アメリカ文化研究は、今―アメリカ文化をどう教えるか？／文化でアメリカをどう教えるか？】

1 番教室

司会：中垣恒太郎（専修大学）

討論者：佐々木優（専修大学）・小森真樹（武蔵大学）

報告者：

馬場聡（日本女子大学）「女子高等教育機関におけるアメリカ研究カリキュラムの変遷と展望――副専攻プログラムの可能性」

丸山雄生（東海大学）「ヴィーガン・スタディーズの教育と実践：（反）肉食から考えるアメリカ文化」

北田依利（東京大学・東京カレッジ・講）「日本で・日本語で、アメリカ史を教えるための目標設定とアプローチの事例報告」

地村みゆき（愛知大学）「先住民視点から紐解くアメリカの歴史と社会：一般教育科目『民族と文化』における授業実践」

【部会 D　食・農業・漁業でみる太平洋世界とアメリカ】　2 番教室

司会：加藤（磯野）順子（早稲田大学・講）

討論者：久野愛（東京大学）

報告者：

新田万里江（武蔵大学）

「札幌農学校における米国の植物帝国主義と日本のセトラーコロニアリズム」

小川真和子（立命館大学）

「海から見たハワイ：ハワイにおける日系水産業の発展をめぐるハワイ準州と連邦政府との軋轢」

二村太郎（同志社大学）

「アメリカ合衆国における都市の『農と食の空間』と地域社会のかかわり：デトロイトでの実践を中心に」

４．注意事項

1）今大会は分科会（オンライン開催）を除き対面のみでの開催となります。

2）大会参加登録は、参加登録ページの URL を、学会ホームページ及びアメリカ学会会員用メーリングリストにて配信いたしますので、2025 年 5 月 23 日（金）までにお願いいたします。会員の方でメールが届かなかった方は、「迷惑メール (junk mail)」フォルダもご確認ください。見つからなかった場合は、お手数をおかけしますが、学会 HP の「お問い合わせ・応募フォーム」の年次大会企画委員会までご連絡ください。

3）年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。

4）会場までの交通アクセスについては、下記 6.の他、学会ホームページをご覧ください。宿泊や交通手段の確保は各自でお願いいたします。

5）非会員の大会参加費は 1,000 円です。大会受付にてお支払いください。

6）理事・評議員会について、弁当の注文は受け付けませんので、ご了承ください。

5. 会場案内

受付　W102 教室

賛助会員（出版社）ブース　W102 教室

会員控室・ゲスト控室　W101 教室

大会本部　W302 教室

〈北海道大学札幌キャンパス人文・社会科学総合教育研究棟へのアクセス〉

・JR「札幌駅」下車、徒歩徒歩 13～14 分、地下鉄南北線「さっぽろ駅」下車、徒歩 17 分

・地下鉄南北線「北 12 条駅」下車、徒歩 8 分

第 59 回年次大会分科会のご案内

*　本大会の分科会は全てオンラインでの開催になります。URL 等は別途連絡致します。

*　参加は会員に限定されます。

１．「アメリカ政治」

責任者： 松井孝太（杏林大学） kmatsui アットマーク ks.kyorin-u.ac.jp

報告者 1： 大津留（北川）智恵子（関西大学）

「アメリカ国内に広がる『国境』： 移民をめぐる立ち位置の対立」

報告者 2： 小椋郁馬（一橋大学）

「アメリカの有権者における世論調査への表現的な回答」

開催日時： 6 月 6 日（金）19:00〜20:40／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

本年度のアメリカ政治分科会は、2 名の会員に最新の研究成果を報告いただく。大津留（北川）会員は、大統領選の争点の一つであった非合法滞在者問題に関して報告する。民主党支持者の多くは市民権への道を、共和党支持者の多くは国外追放をその答えとし、聖域都市は葛藤を経ながらも受入れ体制を整えた。連邦と州、地方政体、そして市民社会のアクターが、分断を乗り越えるために何ができるのかについて、現地調査に基づいて考察する。小椋会員は、世論調査への「表現的な回答」と呼ばれる現象について報告する。アメリカの政治行動論研究では、有権者が世論調査に回答する際に、政党帰属意識などの政治的先有傾向に沿うよう、本心とは異なる認識や態度を表明する可能性が指摘されており、有権者における分極化の進展とともに、注目を集めている。報告者が実施したサーベイ実験の結果を用いて、表現的な調査への回答に関するデータを示し、研究の課題・展望について述べる。

２．「アメリカ国際関係史研究」

責任者： 吉留公太 （神奈川大学） ft101846cs アットマーク jindai.jp

報告者： 尾身悠一郎 （自然エネルギー財団）

尾身悠一郎著『国際経済と冷戦の変容：カーター政権と危機の 1979 年』（千倉書房、2024 年）合評会

討論者：小野沢透（京都大学）

開催日時：6 月 8 日（日）13:00 開始／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

今年のアメリカ国際関係史研究分科会は、尾身会員の著著『国際経済と冷戦の変容：カーター政権と危機の 1979 年』の合評会を行う。対象書はドル価値の維持を切り口としてカーター政権後半の中東政策の変容を論じている点に独自性がある。また、対象書は多数の公文書を用いて議論を裏付けており、カーター政権に関する邦語の史料実証研究が限られていることからも注目に値する。分科会当日は、報告者が対象書の執筆意図と概要を紹介した後、討論者による問題提起を行う。分科会参加者による質疑応答も予定している。

３．「日米関係」

責任者： 末次俊之（松蔭大学）suetoshi007 アットマーク gmail.com

報告者： 久保庭総一郎（読売新聞社）

「デジタル時代のメディア環境：*NYT* の成功、地方紙の衰退、そしてメディアの二極化」

開催日時：6 月 7 日（土）19：00〜20：30 ／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

2000 年代以降のデジタル化の進展により、米メディア業界の勢力図が大きく変化している。デジタル化の勝ち組として知られる『ニューヨーク・タイムズ』（*NYT*）は 2016 年以降、有料デジタル購読者を積み増し、デジタルシフトに成功した。ニュース配信の空間的制約がなくなり、全米へ影響力を強めている。一方で、地方紙は衰

退が進み、「ニュースの砂漠」現象が加速。全米約 3,000 郡のうち、約 7%はローカル紙が全く存在せず、1 紙しか存在しない郡を含めると半数以上となっている。空白を埋めるように右派・左派メディアによる視聴者取り込みも加速している。

本発表では、*NYT* に代表されるデジタル化への移行、地方紙の衰退、党派メディアの台頭という 3 つの視点から、政治とニュースに関して考察する。2024 年の大統領選では、数時間ノーカットで放送する有名ポットキャストが存在感を示した。また日本においても新聞購読率の低下が進んでいるが、米国のような類似の動きが起こり得るか考察する。

４.「経済・経済史」

本年度休会

５.「アジア系アメリカ研究」

責任者： 和泉真澄（同志社大学） mizumi アットマーク mail.doshisha.ac.jp

報告者： 嶋田健一郎（京都大学人間・環境学研究科博士後期課程）

「占領期における日本人・日系人の連合国（主にアメリカ合衆国・カナダ）からの引き揚げについて―活字メディアへの表出を中心として」

開催日時： 5 月 30 日（金）18:00～19:30／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

報告者はリサーチアシスタントとして、Past Wrongs Future Choices プロジェクトのアーカイブスクラスターの調査題目の一つである、「戦後・占領期における日本人および日系人の連合国からの引き揚げ」*の一次史料調査を担当する。本報告では、先行研究を整理した上で、占領期日本の活字メディアにおいて日本人および日系人の連合国からの引き揚げがどのように報道され、引き揚げの当事者らが何を語ったのかを細かく観察することによって、かれらの体験についての日本国内における一般的な認知について考察する。また戦中の交換船による帰国者による手記との比較から、敗戦国となった日本へのこれらの連合国からの引き揚げの体験者の語りの特徴を、GHQ による検閲などの背景を踏まえて検証する。

*当該プロジェクトは連合国としてはカナダ、アメリカ合衆国、ブラジル、オーストラリアをとりあげる。

６.「アメリカ女性史・ジェンダー研究」

責任者： 鈴木周太郎（鶴見大学） suzuki-s アットマーク tsurumi-u.ac.jp

報告者： 板橋晶子（一橋大学他・講）

「第二次世界大戦期 アメリカの広告におけるジェンダー表象―戦時下における『女らしさ』」

開催日時： 6 月 6 日（金）19:00～20:30 ／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

第二次世界大戦下のアメリカでは総力戦体制の下、女性たちは前例のない規模で軍需産業における労働力として動員され、愛国者として称揚された。このような経験はアメリカの女性たちの社会的地位に変化をもたらし、従来の性別役割からの脱却の機会を提供したかのように見えたが、戦後になると女性の本分は家庭にあるというジェンダー規範が再び強まることになる。本報告は、報告者の博士論文での考察をもとに、戦時下の政府やメディアによる宣伝活動の中で示された女性像が、女性の新しい可能性を示すと同時に既存のジェンダー規範を強調するという矛盾を抱えていたことに注目する。政府による宣伝活動や化粧品や下着の広告における女性像などを紹介しつつ、戦争とジェンダー秩序の関係についての広範な議論を促していく。

７.「アメリカ先住民研究」

責任者： 佐藤円 （大妻女子大学） mdsato アットマーク otsuma.ac.jp

報告者： 岩崎佳孝 （甲南女子大学）

「先住民のボーダーランズ―19 世紀後半～20 世紀前半の加米国境地域からの考察」
開催日時： 6 月 2 日（月）19:00 開始／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）
本報告ではまず、19 世紀後半～20 世紀前半までのカナダ＝アメリカ合衆国西部国境地域に生活圏をもつ先住民が生きた「ボーダーランズ（borderlands）」という世界の概念を、「国境（border）／境界（boundary）」あるいは「辺境・フロンティア（frontier）」との異同も含め整理したい。それによって、外部から「部族」として括られる先住民集団は、本来的にいかなる在りようであったのかについて理解を深める。
報告ではまた、ボーダーランズに国家統治を拡げるカナダと合衆国の先住民政策が、ボーダーランズの先住民―具体的には平原オジブワ（Plains Ojibwa あるいは Chippewa）、平原クリー（Plains Cree）、アシニボイン（Assiniboine）、そしてフランス系（一部イギリス系）白人と先住民との混血者メイティ（Métis）ら―にどのような影響を与えたのかについて考察する。そしてこれら「先住民集団」の多くが、両国に包摂・統合されていく過程でそれ以前のかたちとは異なるものとして発現し、現在に至っている事情を理解する。

８．「初期アメリカ」
責任者： 鰐淵秀一（明治大学） swanibuchi アットマーク meiji.ac.jp
報告者： 上村剛（関西学院大学）
討論者： 天野由莉（武蔵大学）・鰐淵秀一
上村剛著『アメリカ革命』（中央公論新社、2024 年）合評会
開催日時： 6 月 7 日（土）14:00 開始／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）
政治思想史研究者である上村剛氏をゲストに迎えて、氏の最新の著作『アメリカ革命』の合評会を開催する。同書は新書形式で著されたアメリカ革命の概説書としては本邦初のものであるとともに、連邦憲法制定を軸に近年の研究成果を踏まえた独自の革命史像を提示している。まず、上村氏に本書の執筆意図と主要論点を紹介いただき、その後、評者によるコメントを行う。新書ながら独創的な論点に富む同書について、その学術的意義や初期アメリカ研究にとって持つ意味について、関心を共有する会員とともに議論を行う機会としたい。

９．「文化・芸術史」
責任者： 小林剛（関西大学） go アットマーク kansai-u.ac.jp
報告者： 永冨真梨（関西大学）
「『エリート』との闘い：2020 年代のカントリー音楽とトランプ 2.0 のアメリカ」
開催日時： 5 月 30 日（金）19:00～20:30／形式：Zoom で開催（URL 等は後日連絡）
今回の分科会では、2020 年代以降のカントリー音楽を概観しながら、アメリカのポピュラー音楽に見られるトランプ 2.0 に特徴的な文化現象を模索する。2020 年代以降のカントリーは、ビルボード誌の総合チャートの上位を独占するほど、アメリカを代表する人気のジャンルとなった。黒人や性的マイノリティのアーティストの活躍も顕著ながら、陰謀論とトランプ大統領を公に支持する保守の白人男性の歌手も健在である。これらのアーティストは、多様性に関して対照的な考えを持つが、どちらもエリートを彷彿させる態度を嫌い、田舎の労働者階級の営みを表現することが多い。バイデン前大統領もトランプ現大統領も定義は違えども両者とも「エリート」に対して警鐘を鳴らす。本発表では、「エリート」に対する闘いの音楽としてカントリーを捉え、現代アメリカにおいてどのような意味を持つのかを考察する。

10.「アメリカ社会と人種 」
責任者： 山本航平（就実大学） duchpb42 アットマーク gmail.com
報告者： 小原豊志（東北大学）
「アンテベラム期のポピュリズム運動における『人種』―『ドアの反乱』を中心に」

開催日時： 5 月 29 日（木）18:00 開始（報告 60 分程度、質疑 30 分程度）／形式 : Zoom で開催（URL 等は後日連絡）

1840 年代初頭、ニューイングランドの小州ロードアイランドにおいて州統治体制を刷新せんとする試みが発生した。その際に採られた方法が既存の州政府の認可を得ずして制定された州憲法（「人民憲法」）を通じてであったこと、そしてこの試みが最終的には州武器庫の襲撃という「暴力」に行きついたことから、この出来事は「ドアの反乱」と呼ばれている。報告者は、この政府改廃運動を人民主権原理の観点からアメリカ・ポピュリズムの源流ととらえる。そのうえで、この原理のもとに制定されたはずの人民憲法において黒人が選挙権から排除されたことの意味、およびこの運動の弾圧後に従来の支配層が実施した選挙権改革において黒人選挙権が容認されたことの意味を考察することにより、アンテベラム期のポピュリズム運動における「人種」の位置づけを考察したい。

第 60 回年次大会について

第 60 回年次大会は、2026 年 6 月上旬に東京学芸大学にて開催を予定しています。開催日時については、後日会報等にてお知らせいたします。